

# 幼児と人間関係 I

## —— 自立心を育む幼児教育の意義と指導の基礎的あり方 ——

Young Children and Human Relationships (1)

—— The Significance and implementation of Developing Self-reliance in Young Children ——

小 山 顕\*

### Abstract

The new course of study for kindergarten has been notified from Ministry of education, culture, sports, science and technology in March 2017. This study attempts to examine the significance and implementation of developing self-reliance in young children that is mentioned as one of the ten ideal figures in young children in the course of study. Developing self-reliance is the core and also essential element of healthy human relationships and a crucial aim of kindergarten education. The following are important points in order for young children to expand self-reliance in their education. First, cultivating an active learning attitude in young children. Second, increasing an educational interaction with young children. Third, implementing a profound educational experience based on meaningful human relationships. In addition, educator's self-awareness is also significant to helping young children to grow their self-reliance.

キーワード：幼児、人間関係、自立心、育みたい姿

### 緒言

平成29年3月31日に「幼稚園教育要領」が改訂告示された。今回の「幼稚園教育要領」の改訂のポイントの一つあげるならば、「育みたい資質・能力」と「幼児期に育てたい力（幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿）」を明記したことにあるといえよう。その「育みたい資質・能力」については幼児教育の特質を踏まえ、具体化し、「3つの柱」として、平成28年12月の文部科学省中央教育審議会答申<sup>1)</sup>、第2部、第1章（3）の幼児教育において、育みたい資質・能力と幼児期にふさわしい評価の在り方についての中で以下のように説明されている。

幼児教育においては、幼児期の特性から、この時期に育みたい資質・能力は、小学校以降のような、いわゆる教科指導で育むのではなく、幼児の自発的な活動である遊びや生活の中で、感性を働かせてよさや美しさを感じ取ったり、不思議さに気付いたり、できるようになったこ

となどを使いながら、試したり、いろいろな方法を工夫したりすることなどを通じて育むことが重要である。このため、資質・能力の三つの柱を幼児教育の特質を踏まえ、より具体化すると、以下のように整理される。

- ①「知識・技能の基礎」（遊びや生活の中で、豊かな体験を通じて、何を感じたり、何に気付いたり、何が分かたり、何ができるようになるのか）
- ②「思考力・判断力・表現力等の基礎」（遊びや生活の中で、気付いたこと、できるようになったことなども使いながら、どう考えたり、試したり、工夫したり、表現したりするか）
- ③「学びに向かう力・人間性等」（心情、意欲、態度が育つ中で、いかによりよい生活を営むか）

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特

\* Ken OYAMA 聖和短期大学 相談援助

1) 文部科学省 中央教育審議会 2016 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）

別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(答申) 文部科学省中央教育審議会

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf) より抜粋

ただし、幼児期においては、これらの3つの資質・能力の柱が完全に育たなければならないということではなく、また3つの柱は、それぞれが独立分離してあるものでもなく、幼児教育では、これらが互いに重複しており、その重なり合うところが幼児教育の核となる部分であると理解することが重要であろう。

この3つの資質・能力を柱として、それらが内容を通して実現する様子を示したものが「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿<sup>2)</sup>」である。この10の項目で示された、育ってほしい姿の個々の内容は、全て5領域の中に含まれているもので、特に真新しいものではないともいえるが、今回の改訂の中で、あえて明記されたという点から重要な内容であることに違いはない。以下がそれら10の項目である。

- ①健康な体と心
- ②自立心
- ③協同性
- ④道徳性・規範意識の芽生え
- ⑤社会生活との関わり
- ⑥思考力の芽生え
- ⑦自然との関わり・生命尊重
- ⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- ⑨言葉による伝え合い
- ⑩豊かな感性と表現

本稿においては、これらの10の姿の内、特に、幼児と人間関係に関した、つまり、領域「人間関係」に関する育ってほしい姿の中の核心といえる自立心に関点を当て、自立心が幼児の内側に養われ育つことの発達の意義について、またその重要な意義を具

現化するために必要な教育的視点、指導、教員の基礎的あり方について考察を試みたいと思う。

第1章においてはまず、幼児を取り巻く現代の特徴とその社会背景を理解するために、幼児と人間関係における現代的課題について取り上げ考察する。続く第2章では、自立心の育ちに関して、①改訂された幼稚園教育要領の中での位置づけ、②発達の視点から見た意義について、続く第3章では、自立心が幼児の内に育まれていくための教師の基礎的関わりについて考察するプロセスを通して、幼児教育において育みたい資質・能力の一領域である「人間関係」についての意義とその育みの実践の重要性に関して理解を深め、また、その実践である指導のあり方に関する可能性について探ることができればと思う。

## 1. 幼児と人間関係における現代的課題

幼児教育に携わる教師にとって、幼児を取り巻く多面的状況の現代の特徴をよく理解した上で、保護者や地域コミュニティとともに幼児の人間関係の育みに携わることは基本的であると同時に、大切にしたい関わりの姿勢、教育者としての役割を担う者としての基盤となるあり方ともいえよう。本章においては、この重要な役割を適当に果たし得るために不可欠な、幼児と人間関係における現代的課題に焦点を当て、その特徴、諸課題をあぶり出し、見ていくことにする。

### 1) 子どもの育ちの現状、社会的背景、環境変化

文部科学省による「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の方向性<sup>3)</sup>」に関する報告によると、子どもの育ちの現状として、基本的な生活習慣や態度が身に付いておらず、他者との関わりが苦手であり、自制心や耐性、規範意識の育ちの未熟さなどが課題として指摘されている。つまりこのことは、子どもの健全な育ちを支えるための基盤となるべき、基本的人間(対人)関係を構築するスキルの獲得の取りこぼしが目立って起きてきているといえよう。その課題が、幼児期から児童期に移行する中でより顕著化され、小学校1年生などの教室において、学習への集中が困難であったり、教

2) 文部科学省 2017 幼稚園教育要領

3) 文部科学省中央教育審議会 2005 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について(答申)

師の話を聞くことができないことにより、授業そのものが小学生の最初の段階において既に成立しないなど、本来、人と人との関わりを基とした学びと成長を支える場であるはずの学級が機能不全に陥っているという深刻な状況が多くみられるようになりつつある。

加えて、近年の子どもたちは、幼児期から既に多くの情報に囲まれた環境におかれている。家庭にあるスマートフォンやタブレットなどに代表される多様なメディア（媒体）を通して動画サイトにアクセスし、そこから受け取る情報量は大幅に増加しているものの、その知識面においては断片的かつ偏った傾向が強く、また受け身的なものが多いため、学びや他者との関わりなどに代表される自発的な活動に対する意欲や関心が低いとの現代的課題も指摘もされている。

子どもの育ちの変化の社会的背景については、少子化、核家族化、都市化、情報化、国際化など日本の経済社会の急激な変化に伴い、人々の価値観や生活様式の多様化が加速している一方で、社会の傾向としては、人間関係の希薄化、地域における人と人とのつながりの希薄化、経済性や効率性を過度に重視する傾向、子どもの育ちをゆったりと見守ろうとする包容的な社会のあり方よりも、大人優先の気忙しいともいえる社会風潮などの状況が見られ、それが、地域社会などにおける子どもの育ちをめぐる環境や家庭における親の子育て環境を変化させており、少なからず幼児を含む子どもの育ちに影響を及ぼしているといえる。

子どもの育ちをめぐる環境の変化に関しては、子どもが育つ場といえる地域社会そのものの環境が変化しており、地域の有する総合的な教育力の低下が幼児と人間関係における現代的課題の一つであるといえるだろう。子どもが成長し自立する上では、実現や成功などの肯定的といえる体験はもとより、葛藤や挫折などの対局にある体験も含めた「心の原風景」となる多種多様な体験を数多く経験することが不可欠であるという指摘がなされている<sup>4)</sup>。しかしながらその一方で、少子化、核家族化の進行により、子どもたちが互いに集団での遊びに熱中し、その中で時にはぶつかり合い、葛藤しながら、相互に影響し合って活動する機会の減少など、様々な体験の機

会が失われているのも幼児を取り囲む人間関係の現代的課題であろう。さらにいうならば、都市化や情報化の進展により、子どもの生活空間の中に自然な原っぱや広場などといった、子どもの豊かな発想力や想像力によっていくらかでも遊びの場とできてしまうような自由性と柔軟性を有した場が少なくなる一方で、テレビゲームやインターネットなどの室内の遊びが増えるなどによる、偏った体験を現代の子どもたちは余儀なくされているといえる。また、地域の人間関係の希薄化や子どもの安全性の問題を過度に気にすることにより、地域社会の大人が地域の子どもの育ちそのものに関心を払わない、関心はあっても関わりづらいという社会の傾向が散見され、そのことが、子ども自身の人間関係を築く力とその関係を維持する力を養いエンパワーメントする機会を剥奪していると考えられることもできる。

## 2) 親の子育て環境の変化

幼児が人間関係について経験的に学習する場としての家庭における子育てについても、その環境に変化が起きている。子育てとは、子どもに限りない愛情を注ぎ、その存在に対して感謝し、日々成長する子どもの姿に感動を覚えつつ、親も親として成長していくという大きな喜びや生きがいをもたらすものである。しかしこのような子育ての喜びや生きがいは、家庭での、また地域社会での人々との交流や支え合いという人間関係があってこそ実感できるものであるのだが、核家族化の進行や地域におけるつながりの希薄化などを背景に、本来、我が子と豊かな関わりを持ちたいと願っているにもかかわらず、子どもとの関わりをどのように持っていけばよいかわからず一人で悩み、孤立感を募らせ、情緒がアンバランスになっている、心身的にも疲弊感を覚えている親が増加しているといわれており<sup>5)</sup>、こうした状況に比例するかのように、児童相談所における虐待に関する相談処理件数も衆知のごとく増加の一途をたどっている。

また、女性の社会進出が一般的になり、仕事と子育ての両立のための支援が進みつつある中で、子育てのほかにも、仕事やその他の活動を通じた自己実現の道が選択できる社会環境にあって、子育てに専念することを選択したものの、そのような生き方で

4) 前掲書 文部科学省 中央教育審議会 2005

5) 前掲書 文部科学省 中央教育審議会 2005

良いのか不安を覚え、子育ては「自分の人生にとってハンディキャップではないか」と感じてしまう親もいるとの指摘がある<sup>6)</sup>。

物質的にはある程度豊かで快適な社会環境の中で育った体験を持ち、合理主義や競争主義などの今日の価値観の中で育った者が多い今の親の世代にとっては特に、決して効率的でも、楽でもなく、自らが努力してもなかなか思うようにはならず、努力の結果の実もすぐには実らないことが多い子育ては、そもそもしんどく、非効率的で、達成感を感じ取りにくいことであり、子育てを通しての喜びや充実感、親として、一人の人として生きがいを感じる前に、ストレスばかりを感じてしまいがちな傾向が強くなっているといえるかもしれない。

加えて、一般庶民にとって景気の回復を肌で感じ取ることが難しく、経済状況や企業経営を取り巻く環境が依然として厳しい中で、労働時間の増加や過重な労働などの問題が生ずる社会傾向があり、親が子どもと一緒に食事を取るなどの子どもと過ごす時間の共有が限定され十分ではなくなっている。このことも親の子育て環境に影響を与えている要因、現代の幼児と人間関係に関わる課題であるといえるだろう。

幼児教育において育みたい資質・能力の一領域である「人間関係」についての意義とその育みの実践の重要性に関して理解を深め、教育の実践の中で、具体的に幼児の内に自立心を育むためにはその前提として、少なくとも教育の実践者が本章において取り上げたような、幼児を取り囲む人間関係に関する現代的課題についてまず深く理解をしていることが不可欠であろう。その前提への理解があつてこそ、初めて現代の幼児、またその家族を取り囲む状況に応じた適当な教育実践の展開が可能になっていくのである。

## 2. 自立心の育ち

本章においては、改訂された幼稚園教育要領の中に記されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の中から、本稿のテーマである幼児と人間関係に特に密接に関連し、その中心をなしているともいえるであろう「自立心」について、幼稚園教育要領の中でのその位置づけと理解、自立心の育ち

の発達的な意義という観点から、それぞれを具体的に見ていくことにする。

### 1) 幼稚園教育要領の中での「自立心」の位置付け・理解

今回の改訂において、幼児教育はその後の小学校教育につながっていくものであることが明確にされたといえる。子どもの育ちについても、乳児からの発達の連続性や「資質・能力」を中心とする考え方によって、幼児教育と小学校以上の学校教育で共通する力を育成することになった。

「資質・能力」というものは、小学校以上での学校教育を通して培われていくものであるが、幼児期はその基盤をつくる時である。その「資質・能力」の基盤は、「幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりする」という教育的プロセスの中で子どもの内側に涵養されていくとされている。その考えに基づいて、生きる力の基礎を一体的に育むために「幼児教育において育みたい資質・能力」が、三つ柱として以下のように定義づけられた<sup>7)</sup>。

#### ①知識及び技能の基礎

遊びや生活の中での、豊かな経験を通じて、感じたり、気付いたり、わかったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」

#### ②思考力、判断力、表現力等の基礎

気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」

#### ③学びに向かう力、人間性等

心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

今回の幼稚園教育要領の改訂により、幼児教育の基本的部分や幼児期に育むべき力がより明確になったといえよう。

これらの資質・能力の柱を踏まえた上で、幼児教育が最終的に向かっていく方向として、より具体的な例として示されたものが、「幼児期の終わりまで

6) 前掲書 文部科学省 中央教育審議会 2005

7) 前掲書 文部科学省 2017



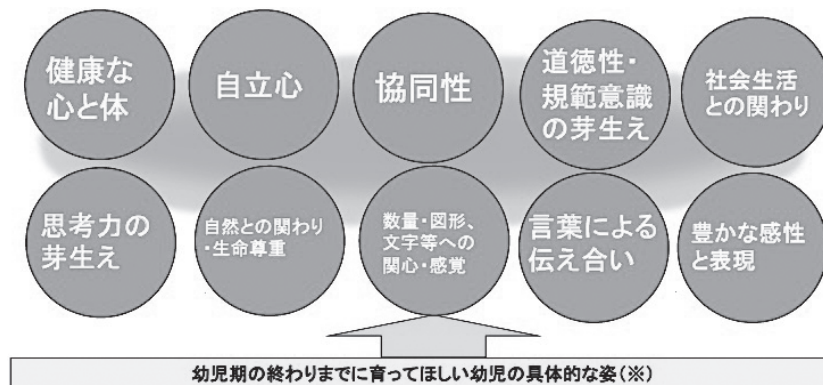


図1：幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の整理イメージ

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2016/04/19/1369745\\_05.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/04/19/1369745_05.pdf)<sup>9)</sup>より抜粋

に育ってほしい姿」(10の姿)のイメージであり(図1)、特に、自立性、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わりの4つの「姿」が5領域の中の「人間関係」にあたるものとして、位置付けられていると考えることができ、特にその中でもコアな部分となるのが本稿において取り上げている「自立心」であると考えてもよいのではないだろうか<sup>8)</sup>。

では「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の中において、その「自立心」はどのように位置付けられているのかを以下の幼稚園教育要領の中にある文言から見ていくことにしたい。

#### 自立心

「身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信を持って行動するようになる」<sup>10)</sup>

ここでの「身近な環境に主体的に関わる」とは環境を通しての教育、主体的な遊びの大切さを表しており、そこで自らの力が発揮されていくことの重要性が述べられている。さらに「しなければならないことを自覚し」と記されているが、それは、乳児期から幼児期への発達の移行の中で「しなければなら

ないこと」を自覚する力が幼児の内側に育まれてくることによって、次の文言にあるように「諦めずにやり遂げる」という、一度始めたことを最後までしっかり成し遂げるという粘り強さという力につながっていくことを表している。

例えば、積み木を高く積み上げたいと思ったら、たとえ時間がかかったとしてもそれを積み上げてみる。何かみんなと大がかりな製作に取り掛かったけれども、一日では作りきれなかった。ならば、完成にむけて継続的にその活動を行おうと粘り強く考え工夫する。換言するならば、意欲、意思をもって頑張ることであり、そのことで、諦めずにやり遂げるということが可能になり、達成感を味わうことで、自信という大きな“宝物”を自らのものとするのが可能となるのである。これらのプロセスによって、幼児の内に「自立心」という一つの姿が育まれていくと考えられ、位置付けられていると理解することができる。

#### 2) 自立心の育ちの発達の意義

自立心を含む人間関係の育ちは4～5歳頃に急激な進展がみられる。エリクソン(Erik Erikson)によると、ちょうどその時期にあたる前学童期の基本的な発達の課題は、自立性の感覚を確立することである<sup>11)</sup>。幼児が、自らの活動を選択し、決定する自由が現実に認められるならば、その子は、自主性を発展させていくことができる。それは、自分で何ら

8) 無藤隆 2017 3法令改訂(定)の要点とこれからの保育 p.32 チャイルド本社

9) 文部科学省 2016 中央教育審議会教育課程部会幼児教育部会(第6回)配付資料幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の再整理イメージ(たたき台)」

10) 前掲書 文部科学省 2017

11) Erikson, E. 1963 Childhood and society 2<sup>nd</sup> ed. New York Norton

かに取り組むことや何かの活動を始め、そしてそれをやり遂げていくといった能力に関しての自信によって特徴付けられるものである。自立心が育まれていることを表す特徴としては、積極的な活動に対する態度を有すること、自分で物事を始められること、身近な課題を成し遂げられること、置かれている環境（人的環境も含む）に対する慣れ親しみの感覚をもてること、目標を自分なりに決めそれを成し遂げられること、新しい事柄にも勇気をもって挑戦することができることなどがある（Hamachek, 1988）<sup>12)</sup>。

逆に、幼児期において不当な制限を受けたり、自分自身で決定することが許されなかったりするなど、自立性の育ちの機会が十分に保障されなかったりすると、幼児は罪悪感を発達させてしまい、自らに対して、延いてはその人間観、世界観そのものに肯定的な態度を示すことを止めてしまうことさえもある。幼児に対する保護者、教員など重要な意味を持つ存在の関わりのあり方は、バーバル、ノンバーバルの両方で伝えられ、幼児は、保護者、教員からの否定的なメッセージをバーバル、ノンバーバルなメッセージを通して与えられ、罪悪感を発達させ、厳格すぎる躾や教育は、幼児を柔軟性の欠如、深刻な葛藤、自責の念、自己非難へと導く傾向があるとされている。例えば、幼児が、教員などの態度や関わりから身体的な欲求や衝動が“良くないもの”といったメッセージを嗅ぎ取るかもしれない。その結果、その幼児は、自分の内に起きてくる自然な衝動や感情を受け入れられないものと感じてしまい、罪悪感を抱くことになるかもしれない（Corey, 1998）<sup>13)</sup>。こうした教員の態度は、幼児のその後の成長の段階で、他者との親密さを楽しみ、他者との関係を築き維持することを妨げる、つまり、豊かな成長、人生の歩み、人間関係の基盤となるためにその幼児期において育ってほしい重要な姿の一つである自立心の育みを制限することになる可能性を有しているといえるのである。

ここでは、幼児の自立心の発達について、エリク

ソンの心理社会的発達理論を軸に述べたが、幼児期における自立心の育みを、その成長発達段階において完全にできるようになる、できるように育てなくてはならない、などという到達目標として捉えるのではなく、幼児の成長の姿に沿った方向性であると捉えるべきであろう。幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の一つである自立性は、なにも幼児の完成された姿ではなく、それまでにその内側に育ってきた姿であり、かつ、その後の成長発達においても育っていく姿なのである（無藤、汐見, 2017）<sup>14)</sup>。また、この育まれた姿は、その後の小学校での教育へとつながっていくことを忘れずにいたい。小学校教育との接続への有効な活用が子どもの発達を長いスパンで見えていくときにより重要になってくるであろう。

### 3. 自立心を育むための指導のポイント （教師のあり方）

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の一つである自立心が幼児の内に育まれていくことを援助するためには、教師としてどのような基礎的あり方が求められるのであろうか。本章においては、自立心を育むための教師の指導におけるスタンドポイントについて考えていくことにしたい。

無藤（2017）<sup>15)</sup> は、2016年12月に中央教育審議会より出された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について」の答申<sup>16)</sup>の中にある「主体的・対話的で深い学び」が、本稿のテーマである自立心を含む幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を育む上での指導の基礎的ポイントとして示していると述べている。

#### 1) 主体的な学びの視点

周囲の環境に興味や関心を持って積極的に働き掛け、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って、期待を持ちながら、次につながる「主体的な学び」が実現できているか。<sup>17)</sup>

12) Hamachek, D. 1988 Evaluating self-concept and ego development within Erikson's psychosocial framework: A formulation. *Journal of Counseling and Development*, 66, 354-360.

13) Corey, M. S. & Corey, G. 2011 *Becoming a Helper* (6th ed.). Pacific Grove, CA, Books/Cole.

14) 無藤隆、汐見稔幸編著 2017 イラストで読む！ 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領はわかり BOOK p.15

15) 前掲書 無藤隆 2017

16) 前掲書 文部科学省 中央教育審議会 2016

17) 前掲書 文部科学省 2017

このポイントにおいて重要になることは、興味や関心を持つ、見通しを持って粘り強く取り組む、遊びを振り返るということになる。見通しを持てるようにするという意味は、この先どうなるのだろうかかと幼児に考え、イメージする機会を提供することといえるであろう。また、行ったこと（遊び、活動）を振り返る時を提供し可能にすることでもある。例をあげるならば、幼児が自らの遊び、活動についてよくよく思い出しながら、その遊び、活動を絵にして描くことなどによって再現、再体験することが振り返りにあたるのである。

幼児が自ら「やってみたい」という意欲を持ち、先の見通しや展開を考えたり、振り返りをしたりしながら、遊びと生活をより発展させていくのが「主体的な学び」だといえる<sup>18)</sup>。このプロセスが、幼児の自立心を育むことになり、さらには小学校以降の教育の段階における「アクティブ・ラーニング」へとつながっていくことになると思われる。

## 2) 対話的な学びの視点

他者との関わりを深める中で、自分の思いや考えを表現し、伝え合ったり、考えを出し合ったり、協力したりして自らの考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。<sup>19)</sup>

この視点において重要となるのが、伝えあうということであろう。幼児が言葉や行動によって自らを自主的に表現し、同時に他者と共に考え、協力し合うことを「対話的」、「対話的な学び合い」と位置付けていると思われる。幼児がそれぞれの思いや考えを互いに自らの言葉や行動で伝え合い、それをつなぎ合って考えを広げたり、深めたりする主体的で積極的な関わり（＝自立心の特徴の表れ）を「対話的な学び」ということができよう。

## 3) 深い学びの視点

直接的・具体的な体験の中で、「見方・考え方」を働かせて対象と関わって心を動かし、幼児なりのやり方やペースで試行錯誤を繰り返し、生活を意味あるものとして捉える「深い学び」が実現できているか。<sup>20)</sup>

ここで述べられている「深い学び」とは、幼児が対象物や他者と向き合い、心をいきいきと動かしながら、その関わりを深めていくことといえるだろう。教師が幼児の体験そのものを大切にしながら、きめ細かく関わることで、対象物、他者との出会いを通して幼児の中に面白さ、興味・関心、物事のつながり・しくみなどについて考えようとする態度が生まれ、試行錯誤を繰り返しながらも根気強くその学びのプロセスに取り組む、つまり、幼児がその体験をどのように豊かに体験できるか、そのための力を養うことが「深い学び」といえるのであり、その一つ一つの小さな積み重ねが幼児の主体的で積極的な姿の表れとしての自立心の育みへとつながっていくことになると思うことができるのではないだろうか。

以上の3つの「視点」から、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の一つである自立心の育みにあたっての基礎的な指導のポイントについて見ていった。これら一つ一つのポイントはこの度の新しい幼稚園教育要領に打ち出されている教育内容を具現化するための非常に重要な鍵となる要素であることはまぎれもないことである。しかし、より重要なポイントは、これらの視点をういて生きた教育を実践する存在である「教師」そのものにあるといえるのではないだろうか。最後にそのことについて少し触れ、本稿を閉じることとしたい。

## 結言

本稿では、「幼児と人間関係Ⅰ」と題し、特に、新しい「幼稚園教育要領」の中に打ち出された、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿のうち、領域「人間関係」の中核であると考えられる「自立心」の育みに着目し、自立心を養う幼児教育の意義とそのための指導の基礎的あり方について、新たな「幼稚園教育要領」の内容を分かりやすく紐解いた書籍等を元にして考察を行った。この度の「幼稚園教育要領」の改訂は、「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」との同時改訂をあわせて、乳幼児期から小・中・高校教育までを見据えた大きな流れを大切にして成り立っている点、また、幼児期に育てたい力が具体的に明記された点など評

18) 前掲書 無藤隆、汐見稔幸編著 2017

19) 前掲書 文部科学省 2017

20) 前掲書 文部科学省 2017

働されるべき点が多くあると思われる。その中において、あえて教育の本質という視点に再度立って一言述べて稿を閉じたいと思う。

教育とは何であるのだろうか。何を基盤として行われるべきであろうか。そのことを考えるときに、教育とは人と人との関係を介して（基盤として）行われる業であるということができないのではないだろうか。どんなに素晴らしい道標となるマップや役に立つ使い勝手の良いツールがあったとしても、それらを適切に活用することができなければ、マップやツールの存在は無に等しい物と化してしまう。つまり教育の実践において最も重要な要素は「教育者自身」ではなかろうか。

幼児教育において、幼児の自立心を育もうとするのであれば、幼児と向き合う教師自体の内にどのように自立心が育まれているかが最重要な鍵となる。よって、幼児教育に携わる教師は、幼児の自立心の育みにのみ目をやるのではなく（無論このことは重要だが）、自らの内側に対して目を凝らし、自身の発達はどうか、自身の内にある幼児の自立心の育みを促進するストレングスは何なのか、また場合によってはその育みを妨げることにつながるような注意すべき点は何であるのか、実際に注意すべき点を認めることができたのであれば、その課題を克服していくためにどのように取り組むことができるのか、そういった深い内省に基づいた自らに対する気付きと具体的な行動とが、実り豊かな教育、真に幼児の育みを支える教育に必要不可欠であるといえるのではないだろうか。

新たな幼稚園教育要領に基づいた、さらに豊かさを持った幼児教育の実践により、幼児たちの中に多くの力が育まれていくことを願って止まない。

#### 参考文献

- Corey, M. S. & Corey, G. 2011 Becoming a Helper (6th ed.). Pacific Grove, CA, Books/Cole.
- Erikson, E. 1963 Childhood and society 2<sup>nd</sup> ed. New York Norton
- Hamachek, D. 1988 Evaluating self-concept and ego development within Erikson's psychosocial framework: A formulation. Journal of Counseling and Development, 66, 354-360.
- Hamachek, D. 1988 Evaluating self-concept and ego development within Erikson's psychosocial framework: A formulation. Journal of Counseling and Development, 66, 354-360.
- 無藤隆 2017 3 法令改訂(定)の要点とこれからの保育

- p. 32 チャイルド本社
- 無藤隆、汐見稔幸編著 2017 イラストで読む！ 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領はわかり BOOK p. 15
- 文部科学省 中央教育審議会 2005 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/04102701/002.htm#top](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/04102701/002.htm#top)  
閲覧日2017年11月10日
- 文部科学省 2016 中央教育審議会教育課程部会幼児教育部会（第6回）配付資料 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の再整理イメージ（たたき台）」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/siryo/\\_icsFiles/afiedfile/2016/04/19/1369745\\_05.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/siryo/_icsFiles/afiedfile/2016/04/19/1369745_05.pdf) 閲覧日2017年10月20日
- 文部科学省 中央教育審議会 2016 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afiedfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afiedfile/2017/01/10/1380902_0.pdf) 閲覧日2017年10月30日
- 文部科学省 2017 幼稚園教育要領  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afiedfile/2017/05/12/1384661\\_3\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2017/05/12/1384661_3_2.pdf) 閲覧日2017年10月20日